

“Why not NP?”構文の解釈成立に名詞の意味情報が果たす役割

－フレーム意味論の観点から－

横森大輔

京都大学大学院 人間・環境学研究科 言語科学講座
yokomori_daisuke@yahoo.co.jp

1. はじめに

一般に、自然言語の文および発話において、動詞などの<述語(predicate)>こそが、形式と意味の両側面の中心である、と考えられている。ところが、実際の言語使用データを観察すると、<述語>を欠いた表現の使用が広汎に認められる。例えば、英語の口語表現には、(1)のようなものが存在する。

(1) Why not a pill?

この表現には<述語>が含まれていないが、聞き手は「薬を飲んだらどう?」という解釈を得ることができるだろう。

本稿は、この“Why not NP?”構文の発話から解釈が得られる過程について、特に名詞の意味的な貢献に着目して検討し、モデル化を試みることを目的とする。

2. 構文の特徴と問題の所在

2.1 形式の不完全性と機能の完結性

ここで扱う“Why not NP?”構文とは、(1)のように[Why not] + [NP]のみから構成される形式を指すものとする。[NP]の部分は様々な語彙項目をその値として実現する変項であり、一定の生産性を持つ構文である。

この構文は口語的な表現であり、一般的なWH-疑問文(e.g. (2))にみられる形式パターンからは大きく逸脱している。

(2) Why don't you take a pill?

特に注目すべきは、“Why not NP?”構文には動詞などの<述語>が含まれていないという点であ

る。この点は、同じく口語的である(3)のような表現と比べても大きな違いといえる。

(3) Why not take a pill?

“Why not NP?”構文は(2)や(3)のような事例と異なり、<述語>が含まれていないにも関わらず発話としての意味解釈が十分に得られる。この構文は、形式上はある意味で不完全である一方で機能的には完結しているといえる。というよりもむしろ、機能的に完結しているが故に、結果として人々に繰り返し使用され得る生産的な構文となっているといえよう。

2.2 「提案」機能とその理解

では、“Why not NP?”構文はどのような機能を果たすだろうか。

一般に why および not を伴う英語の疑問文は、聞き手の将来の行動に対する「提案」の<発話の力(illocutionary force)>を伴うことが多いことが指摘されている(cf. Gordon and Lakoff, 1971; 今井・中島, 1978; Quirk et al., 1985)¹。実際、(1)、(2)および(3)の発話は、いずれも「薬を飲んだら?」という「提案」の機能を持つものと考えられる。

ところで、これらの発話が「提案」という機能を果たすためには、「提案される行動の内容」が聞き手によって理解されなければならない。この点に関して(2)では、take a pill という動詞句によって「提案される行動の内容」が表現されており、聞き手は理解することができる。

¹ <Why と not を伴う質問が「提案」の発話の力を伴いやすい理由>および<(1),(2),(3)の各発話の間の語用論的な相違>といった問題は、重要ではあるが本稿の直接の課題とは異なるため、ここでは論じない。

問題の(1)の発話は、(2)や(3)と異なり<述語>が含まれておらず、「提案される行動の内容」は表層の言語形式に表現されていない²。それにも関わらずその「提案される行動の内容」が理解されるのは、どのようなメカニズムによるものだろうか。これが、本稿が特に問題とすることである。

3. フレーム意味論の観点から

3.1 行動の理解における“部分”と“全体”

そのメカニズムはさておき、(1)の発話の聞き手は、言語表現 *pill* から「薬」という事物の概念を理解し、さらに発話全体で「薬の服用」という行動が提案されていることを理解することができる。既に指摘したように<言語化された「薬」の理解から、言語化されていない「薬の服用」の理解にどのように至るのか>ということが問題になるのだが、この問題を考える上で注意しなければならないのは、「薬」と「薬の服用」は単に異なっている別々の概念なのではなく、<部分-全体関係>を構成しているということである。「薬の服用」という<行動>からみれば、「薬」は<行動の構成要素>として位置づけられる。すなわち、(1)の聞き手は<行動の構成要素の理解>から<行動全体の理解>に至ることに成功しているのである。

従って、“Why not NP?”構文において、[NP]が言及する事物を<特定の行動の構成要素>として概念化することができるならば、話し手から聞き手に対して提案されている行動全体について理解できる、と考えられる。

² 同じく“Why not NP?”という統語形式であっても、(i)のように変項の[NP]に動詞由来の名詞が用いられているのであれば、「提案される行動の内容」が聞き手に理解されるのは不思議なことではない。

(i) Why not **an injection**?

ここで用いられている名詞 *injection* は動詞 *inject* に由来する派生名詞であり、意味的には<述語>に準じる要素とみなすことができよう。次の例も同様に解釈できる。

(ii) Why not **a cost-benefit analysis** of trunk roads? (BNC)

従って、これらは「発話によって提案される行動が言語的に表現されていないにも関わらず理解されるのはなぜか」という本稿の問題意識から外れるものとして位置づける。

3.2 フレーム意味論

以上のような問題をより明示的に扱うため、本稿ではフレーム意味論 (e.g. Fillmore, 1982) の枠組みを導入する。

フレーム意味論は、<ある言語表現が表す概念の理解は、その概念が構成要素となるようなより大きな概念のまとまり (=フレーム) の理解を基盤として可能になる>という観点³から、自然言語における意味の諸問題の記述・説明を行うものである。

フレームは言語表現から<喚起(evoke)>されるものであり、聞き手・読み手はそのフレームを理解することで初めて表現の意味を理解することができる。したがって理解される内容と比べると言語化される内容は常に部分的ないし断片的である⁴。

また、Fillmore のフレーム意味論を独自に発展させている黒田 et al.(2004)は、広義のフレームの中でも特に、(誰が/何のために/何を/どうする)という形で構造化している<状況>という理解の単位の重要性を説いている。この<状況>というフレームは、意味役割(動作主, 主題, 対象, 道具 etc.) の集合体として規定される。

3.3 “Why not NP?”の理解過程

“Why not NP?”構文の発話を理解するということとはどのようなことなのか、フレーム意味論の観点から改めて捉え直してみよう。

3.1 節の最後に述べた、“事物を<特定の行動の構成要素>として概念化する”とは、“ある<状況>フレームにおいてその事物が担う意味役割を認識する”ということに他ならない。

(1)の例に関して言えば、名詞「薬」(部分)が、「薬の服用」という状況フレーム(全体)を喚起し、その中で「薬」が<服用物>という役割を、

³ “By the term ‘frame’ I have in mind any system of concepts related in such a way that **to understand any one of them you have to understand the whole structure in which it fits**” (Fillmore(1982: 111)より。強調は筆者)

⁴ “[W]e can say that **the frame structures the word-meanings, and that the word ‘evokes’ the frame.**” (Fillmore(*ibid.*: 117)より。強調は筆者)

聞き手が「服用者」という役割を担うことが理解されることで、発話における提案が理解される。

上のフレーム意味論の枠組みに基づく理論的考察から、“Why not NP?”構文の解釈が得られる過程を次のように一般化する。

- (4) “Why not NP?”構文は、[NP]の値Xがある状況フレームを喚起し、かつ、その状況フレームの中でXおよび聞き手がいずれも何らかの意味役割を担うものとして概念化されるならば、そのフレームが表す状況が、聞き手の将来の行動として提案されているものと理解される。

4. フレーム基盤アプローチの有効性の検証

4.1 実例の分析

前節で与えた一般化に従うことで、コーパスから得られる実例に対して一貫した記述・説明が与えられることを示す。

(5)は、バナナが健康に良い食品であると紹介するインターネット記事のヘッドラインである。

- (5) Why not a **banana** a day?

[<http://www.hinduonnet.com/thehindu/mp/2006/07/13/stories/2006071302180300.htm>]

名詞<バナナ>は典型的に人間にとって<食べる>という行動の対象であると認識されるため、<食事>フレームが喚起され、このヘッドラインは<食事者>という意味役割を担う読者たちに対して「バナナを（一日一本）食べたらどう？」という呼びかけとして解釈される。

次に(6)においては、[NP]には<軍への匿名の手紙>という値が実現している。この名詞は、我々の社会・文化的知識から<重要な情報の提供>という状況フレームを喚起するだろう。そのフレームの中で名詞は<情報提供手段>の役割を担うものとして、聞き手は<情報提供者>の役割を担うものとして認識されるだろう。そのため発話は「(匿名の手紙で) 情報提供したら？」という促しとして解釈される。

- (6) “Do the Grand Army know about these packets?”

“Probably not. They haven't got our contacts in the postal service.”

“Well, then,” suggested Karelius, “why not an anonymous letter to them? I've an aversion to tale-bearing from my schooldays, but the man's such a public menace we can hardly allow ourselves to be deterred by scruples of that sort.”

(BNC)

(7)の例では、サッカーの試合をテレビでどのように放映していくかという話題に関して、この記事の記者がコメントしている。[NP]の値は<試合のハイライトを流す番組>であり、この場合は<放映>のフレームを喚起する。結果としてこの発話は番組の放映を促すような記者の提言として解釈される。

- (7) Trevor East, the new producer of The Match, explains the decision to wait for late autumn: “People are reluctant to watch televised football or anything else on a sunny afternoon. (...) In any case, we have only 18 matches live and need to have some week-by-week continuity, building towards the climax. The deal doesn't buy us a match every week.”

So why not a proper highlights package on Saturday night, or non-live Sundays as some regions are already trying?

(BNC)

4.2 負例の予測

この構文における生産性は無限ではない。(1)と形式上は同一であっても、(8)のような発話から(特殊な文脈を設定すること無しに)何らかの解釈を得るのは難しい。

- (8) ??? Why not a **hill**?

これは、人間にとって「丘」という事物に対する典型的な働きかけが知識として存在しないからである。言い換えれば、<人間 (=聞き手)>と

＜丘＞を参与者として含むようなフレームは喚起されにくいということである。

ここに示されるように、名詞の中でもフレームを喚起しやすいものと喚起しにくいものが存在し⁵、構文の成立が名詞によるフレーム喚起に依存している“Why not NP?”構文に生起しやすいのは（一般的な傾向として）前者であると考えられる。

このように、フレームに基づく一般化に従うことで、前節で行ったような正例の記述・説明だけでなく、このような負例の発生予測も正しく予測することが可能である。

4.3 文脈による解釈変動の予測

ここまで本稿では、“Why not NP?”構文の発話の解釈の決定要因を[NP]の意味を軸として論じてきた。しかしながら、実際には発話の場、特に被提案者たる聞き手がどのような立場の人間であるかによって、発話の解釈は大きく変動する。

本稿におけるフレームに基づくアプローチでは、この文脈による解釈の変動も予測できる。

例えば、(1)の発話は、医師や薬剤師に対して言う場合、聞き手は薬を処方・投与する側の立場となるため喚起されるフレームは＜服用＞ではなく＜処方＞や＜投与＞となり、発話の解釈は「薬を出したら？」という提案になるだろう。

4.4 関連する現象への応用

山梨(2000)は、以下のような言語事例を報告している。

(9) Shall we Häagen-Dazs? (山梨, *ibid.*: 216)

この表現は、“Shall we VP?”という既存の構文を基礎としながら、動詞ではなく名詞が用いられているという点で、本稿で取り上げた“Why not NP?”構文の問題と類似している。従って、本稿の枠組みを応用することで分析が可能だろう。すなわち、人々の経験知識から、名詞 Häagen-Dazs は＜(嗜好品の) 食事＞というフレームを構成する役割＜

食品＞として認識され、かつ聞き手はこのフレームの参与者として認識されるため、聞き手に対する「食べることの勧誘」を行っている発話であるとの解釈が可能になる。

5. おわりに

本稿では、“Why not NP?”構文の解釈過程について、特に名詞の意味的貢献に注目して考察した。

自然言語の使用者である我々は世界に関する知識を豊かに備えており、言語によってごく限られた一部が表現されるだけで、詳細な状況理解が達成される。特にある種の名詞が状況のフレームの喚起に果たす役割は強力であり、“Why not NP?”構文はこのような認知的基盤に支えられていると考えられる。

このような問題意識が有効なのは今回とりあげた構文に限られるものではない。言語表現の意味と形式は、(少なくとも話し言葉においては)抽象的な統語規則のような言語システムに固有の知識以上に、生活文脈に根付いた具体的な経験的知識に支えられているといえるだろう。

[謝辞]

本稿の内容の一部は、山崎章裕氏(京都大学大学院)との議論に負っている。ここに感謝の意を表したい。ただし、本稿に残る過誤は全て筆者の責任によるものである。

[参考文献]

- Fillmore, Charles J. 1982. “Frame Semantics,” *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137, Seoul: Hanshin.
- Gordon, David and George Lakoff. 1971. “Conversational postulates,” *CLS7*, 63-84.
- 今井邦彦・中島平三. 1978. 『文II (現代の英文法第5巻)』, 東京: 研究社.
- 黒田航・中本敬子・野澤元. 2004. 「意味フレームに基づく概念分析の理論と実践」, 山梨正明他(編), 『認知言語学論考 No.4』, 133-269, 東京: ひつじ書房.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London/New York: Longman.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』, 東京: くろしお出版.

[コーパス・検索サイト]

British National Corpus (BNC)
Google [<http://www.google.co.jp/>]

⁵ この問題は、黒田 et al.(2004)における＜「役割名」と「対象名」の区分＞と大いに関係があると思われる。